ざらん、あたら光陰を徒に費す事、聖賢の旨に違ふらんとぞ覺ゆるといひければ、世に高麗胡椒として好む人、その辛き事魂を消り、胸を爛らかして、これを見しと思ひたる彼の圍碁雙六に負色付きて憤しきを慰みにせば如何せん、蓼食ふ虫もあるものをと、呟く人も有りけり、

雙六に七目塞がれ碁にしちやう唐椒より辛う覺ゆる

〔梅園叢書〕碁將棊に遊ぶ人の箴

碁象棊握槊、その品はかはれども、人の心を奪ふ事は同じ、或は一二の遊侶を迎へ、或は旅路の憂をわすれ、鬱をひらき生を慰めんにはよし、又何もつとむるいとなみもなく、手を拱き人ごとなどいはんよりは、物と相忘れんはよかるべし、平生の勢力を是につくしてんは、その器小きに似たり、誠に局にのぞむときは、盛衰勝敗ありて、甚おもしろきものゆゑ、夜のあけ、日のくるゝも去らざる物なり、よりて是を木野狐ともいへり、晉の陶侃といひし人、枰を江にしづめしも、事に害ある事を察してなり、近頃黒田如水軒、石田三成と怨をむすばれしも、その事碁より起れり、畠山が讒にあひしも、平賀武藏守と六郎重保と碁を爭ふよりおこれり、さいへばとて、此事去らざれといふにもあらず、身謙り、人と爭ひいかる心をやめて遊ばゞ、時として養生の道ともなるべし、

〔拊掌錄〕葉濤好奕棋、王介甫、作詩切責之、終不肯已、奕者多廢事、不以貴賤、嗜之率皆失業、故人目棋枰爲木野狐、言其媚惑人如狐也、

〔古今和歌集十八雜〕つくしに侍ける時に、まかりかよひつゝ、ごうちける人のもとに、京にかへりまうできてつかはしける、　きのとものり

ふるさとは見しごともあらず斧のえのくちし所ぞ戀しかりける

〔述異記上〕信安郡有石室山、晉時王質伐木至、見童子數人棊而歌、質因聽之、童子以一物與質如棗核、質含之不覺饑、俄頃童子謂曰、何不去、質起視斧柯爛盡、既歸無復時人、

雜載